青少年地域活動ふるさとを見なおそう　第2集『長門昔ばなし』より

大水と芝宮の宮守

古町の集落は長門町を南北に貫く、依田川に沿って中世の頃段丘の下に宿場町として開けた町でしたから、たえず水害の危険にさらされていました。

自分たちの家や田畑を守るために、水魔との戦いは古町に住む人たちの宿命でした。今のように機械はありませんし、土木技術も発たつしていませんでしたから、水を防ぐためには、みんな人の力にたよっていました。

ですから、小さな水害は毎年毎年くり返され、そのたびごとに村中で水防にあたりました。ときには、依田川に沿って築かれていた千五百メートルもある堤防がみんなこわされてしまい家も二十軒も流されたこともありました。

水を防ぐのに古町の人たちが一番気を配ったところは上川原（現在のかまば）付近でここの堤防がこわれると水が侵入し、上宿はもちろん中宿も下宿も流されてしまいますから、ここは堤防だけでなく、川除林といって木を植え村の保安林として厳重に保護をして水害に具えました。

寛保二年の八月二日といわれていますから、夏も盛りの頃です。数日降り続いた雨で、昼頃から大ごう水となって依田川を流れ上川原の堤防は、今にもくずれ落ちそうになり、上の段の南端に祭られている諏訪社、芝宮の段丘はだく流の直撃を受け、段丘の一部がくずれはじめました。さあ たいへんです 村では早鐘を打ち鳴らしこの危険をみんなに知らせました。

早鐘をあいずに村中の働ける人は みんな芝宮の辺に集まり、木の枝を切りおろし、縄で継ぎ合わせて水よけにしたり、わくを丸太で組み、石を載せて水を防いだり、俵で土のうを作って積みあげて水の侵入するのを防ぐなど、水魔との死闘が数時間続けられましたが 雨は降り続き水勢はますます強くなるばかりでした。このまゝですと古町が流がされてしまうのは時間の問題だ、とさえ思われました。

もう運を天にまかせる思いで、ぼう然としていると、〝ばっしゃん〟と大きな音がして、芝宮の大木が倒れ、依田川のだく流に飲みこまれました。ほんの一瞬のできごとでしたが、この御神木が堤防につっかかり、防水の役を果たし、古町はかろうじて水難をのがれました。

けれども、この付近は、依田川のだく流が満々とたゝえられ、中島沖（なかじまおき）は流れ、たたえられた満水の中から腹の真っ赤な大じゃが、かまくびを持ち上げて四方を見まわし、水の中に沈んで流れてゆきました。みんなが「芝宮の宮守だ」と驚きの声をあげました。